

浄土

monthly Jodo

2019
October

10

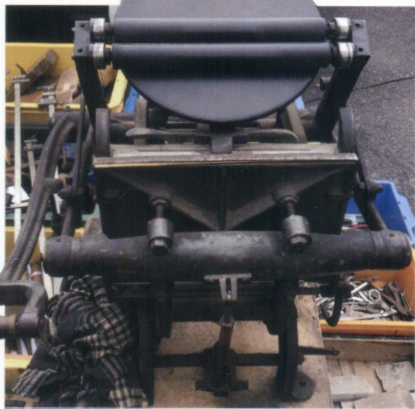
貧乏董

小型活版印刷機

三宅政吉

グラフィック・デザイナー

連載 36



円盤部分にインクを盛りローラーにインクをつける。ローラーで版にインクを塗り、ハンドルを引いて紙に印刷する。意外と力仕事である。左右・奥行・高さともに約60cm。

東京・世田谷区のY印刷所の次男Mさんと知り合ったのは三〇数年前になる。Mさんは私より二歳ほど年長だが、ほぼ同世代と言っていいだろう。

Y印刷所は彼の父親が戦後すぐに作ったらしい。Mさんと知り合ったころには、小さいながらも三階建ての工場と事務所が入ったビルを所有していた。彼はその専務という肩書きだった。彼の口癖は「印刷業なんて川下の仕事ですよ。これからはダメです。私は川上の仕事をやりたいんです」というものだった。

それで彼が何をやり始めたかという、出版業である。そこから発行される雑誌のデザインを私がやったのだが、所詮は素人オナーの仕事である。編集長をふたり入れ替え、月刊で20数号まで出して結局廃刊となった。残ったのは借金と在庫の山である。まあ、そ

んなことはどうでもいい。よくある話である。

彼とは妙にウマが合って、酒を呑みながらいろんな話をした。印象に残っているのは、彼の母親が毎日夜中まで小さな活版印刷機で、パカバカ(Mさん曰く)

名刺や葉書を印刷していたという話である。来る日も来る日もその繰り返しで、母親はとうとう身体を壊した。Mさんはそのときにこんな仕事はダメだ、もつと川上の仕事をやらなきゃと思ったと言う。子どものころの話である。ただ、父親の才覚もあつたのだから、Y印刷所は順調に仕事を増やしていったし、彼もそこで若くして専務という地位についた。

写真の小型活版印刷機は、上野・不忍池の骨董市で見つけた。まだ使えそうである。そうか、Mさんの母親が夜なべ仕事で身体を壊すまで使っていたのはこういう印刷機だったのかと、三〇数年前の話を思い出した。買うつもりはないが親父に値段を聞いてみる。六万円、自分で運ぶんだしたら五万円にしてくけどな。とのことである。置く場所があれば本当は欲しいのだが、設置するスペースもないし、インクの臭いがきつと近所迷惑だろう。

印刷業界はこの三〇年で大きく変わってしまった。活版印刷もはなくなつたし、写植屋さんも消えてしまった。色校屋さん^{いろやうや}も今はほとんどない。とくに打撃を受けたのは、小さな印刷屋だろう。ネット印刷の普及は小さな印刷屋の息の根を止めたといっている。

前にも触れたが、活版印刷のよさを再発見した若いデザイナーたちが小型の活版印刷機を手に入れ、いろいろと試行錯誤を繰り返しながら、ユニークな印刷物を生み出しているのもまた現在の印刷の姿ではある。

小型活版印刷機はまったくなくなったわけではなく、今でも新品が受注後作られ販売されている。

浄土

2019/10月号 目次

釈尊より法然へ②	頼住光子	2
法然上人と親鸞聖人②④	林田康順	10
連載 微風吹動	工藤量導	16
連載 江戸の川を歩く③②	森 清鑑	20
連載小説 渡辺海旭⑩	前田和男	26
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	31
編集後記		32

表2 貧乏骨董	三宅政吉
---------------	------



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
表紙写真＝鬼海弘雄
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

釈尊より 法然へ

大乘仏教における浄土宗

法然上人鑽仰会

講演概録

2

東京大学教授

頼住光子

空——縁起の存在論

私たちは生まれてから死ぬまで一人の同じ人間だと考えがちですけれども、決してそうではなくて、私たちはさまざまなものとの関係で常に移り変わり続けていると考えるのが、仏教の考え方、関係的な成立の考え方ということで、これが大乘仏教の利他や慈悲というものとは結びついてくるわけです。

つまり、自分が独立してあるのではなくて、自分があるということは、関係の中で、言ってみればありとあらゆるものと関係し合いながら自分はここにこうしているということですね。その関係を強化していこうという考え方が、慈悲であり、利他ということになります。関係的成立から出てくるのが自他一如で、要するに自分があるということが他人があると

いうことで、自分と他人というものは密接にかかり合いながら、自分と他人をそれぞれに成り立たせている。自分があつて、他人があつて、その間に関係が生まれるのではなくて、最初に関係があるからこそ、その関係を担うものとして私とあなたが同時に成立するのだけれども、関係が変われば私もあなたもどんどん変わっていくというのが、仏教のダイナミックな存在論です。

これは別に大乘仏教から始まったわけではなくて、釈尊の時代からこういう自他一如、空―縁起という考え方は基本的にはあつたと思うのですけれども、大乘仏教の歴史の中で龍樹が出て、この空―縁起の考え方について精密に思索していったということがあります。特に大乘仏教の中で強調され、そして利他と慈悲という大乘仏教の重要な実践、それを支える存在論が、まさにこの空―縁起、無自性という存在に対する考え方ということになります。

一切衆生のイメージ

さて、この空―縁起の考え方と並びまして、成仏は非常に難しいということが、大乘仏教の発展の重要な契機になつていきます。つまり、「成仏の困難さの自覚」ということです。

法然上人が凡夫の自覚、また三学非器の自覚ということをおっしゃいますけれども、まさにこの大乘仏教の発展の中心にあつた成仏の困難さの自覚を深めたもので、それが法然上人の三学非器ということの大切な意義ではなかつたかと思われまふ。ですから、私自身としては、まさに大乘仏教の思想の一番重要な深いところを法然上人が受けとめて、そしてそれを日本の現実の中で展開させていったと考えております。

さらに、このような成仏の困難さや、空—縁起の存在論を基盤とする利他の精神、そのようなものと並んで大乘仏教の精神的なモメントとして非常に注目されるのが、「一切衆生」という捉え方だと思うのです。一切衆生という言葉は、初期仏教にはないというわけではないのですけれども、そんなに目立つわけでもありません。こういう一切衆生、生きとし生けるものという捉え方は、むしろ大乘仏教になってからです。一切衆生という言葉が大乘仏典の中に多く見られるようになります。

この一切衆生の基本イメージというのは、解脱できずに輪廻転生を繰り返して、六道の中を迷い苦しみつづ、さまざま者たちというイメージではないでしょうか。このような救われない、苦しむものたち、こういう存在を救うことが、大乘仏教の中で非常に重要なポイントになってくると思います。初期仏教や部派仏教においては、基本的には自分で一生懸命、修行して、悟りを目指す。要するに、自分が功徳を積んで、自分が解脱するという、いわば自業自得、自分で善い行いをして、善い結果を得るということを目指したわけですが、大乘仏教になりますと、必ずしも自分では功徳を積むことのできない者も含めて、一切衆生を救済していくという考え方が非常に大きな課題となってきました。一切衆生が一緒に救われる、つまり、自分だけが救われるのではなくて、一切衆生とともに救われる「共同成仏」、それが大乘仏教の重要なテーマになってきたと思うのです。この課題に応えていったのが、浄土教であり、さらに浄土教をある意味、究極まで推し進めていった法然上人ではなかったかと私自身は思っております。

阿弥陀仏信仰や浄土信仰につきましては、特に仏教史の立場からはいろいろな議論がございます。例えば、インド外部のゾロアスター教やギリシャ思想などの影響があったか、

またインド国内のさまざまな信仰の影響があったかなど、いろいろ言われています。けれども、どういう起源を持つかということはさておきまして、一番大切なのは、阿弥陀仏への信仰が大乘仏教のさまざまな思想、それも一番重要なポイントを組み込みながら、仏教の思想として体系化されたということではないでしょうか。それが例えばゾロアスター教に起源を持っているから、それは仏教とは外れているということと言えないと思うのです。たとえゾロアスター教を取り入れたとしても、それが仏教思想として体系化されている、仏教思想になっているというところが非常に大切なことではないのかと思われま

す。特に浄土信仰を考える上で、例えばキリスト教などの唯一神信仰に通じるところがあるとか、仏教としては異例の教えであるということが強調されもします。私個人といたしましては、もちろんそのように言える側面もあるとは思いますが、大乘仏教の真髓を吸収した上で展開しているのが、阿弥陀信仰であるというところは押さえておかなければいけないことではないかと思えます。

大乘仏教にはいろいろな特徴があるのですが、その特徴は浄土教にも顕著に見られます。ここで簡単に大乘仏教の諸特徴を確認しておきたいと思えます。

(1) 大乘仏教一般に、超越的な存在としての仏菩薩の無限の慈悲による衆生救済ということが言われます。このことが浄土教の中では、阿弥陀仏の慈悲という形で非常にはっきり見えてきます。

(2) 大乘仏教では他土仏、現在仏の信仰が盛んになりました。

(3) 廻向思想を特徴として挙げることができます。先ほど申し上げましたように、仏教は自業自得です。自業自得というと、現代の日本語では悪いことについてだけ言ってい

ますけれども、本来は善いことについても悪いことについても言います。例えば、自分が善いことをしたら善い報いがあると言い、自分が一生懸命、修行すれば悟れるというのが因果応報の自業自得の考え方だったのです。それが、大乘仏教で盛んになった廻向説になりますと、自分がなした功德を他者に差し向けて、他者を救済するといふことが強調されてきます。要するに、自業自得だけではなくなのです。自分が積んだ功德を自分が受けるのではなく、それを他者に差し向けて、自分では善いことができないう他者を救済するといふ考え方が出てくるわけです。

このような廻向思想としてその後の展開で重要なのは、曇鸞の二種廻向、往相還相の二種廻向です。これを受けて法然、親鸞による往相廻向、還相廻向の思想が展開していくことになります。

(4) 誓願思想を特徴として挙げることができます。大乘仏教一般で、菩薩の誓願というところが重視されますが、浄土教の場合には、法蔵神話、つまり、法蔵菩薩が四十八願を立てるところにはつきりその特徴が、見えてくるわけです。

(5) 成仏思想を特徴として挙げることができます。菩薩が成仏するということ、これはまさに法蔵神話のベースになっていると思います。

(6) 見仏思想を特徴として挙げることができます。これも浄土教一般で重要な思想ということになります。これは、大乘の菩薩が般若の智慧を得るために禪波羅蜜ぜんはらみつを行うと、臨終見仏や臨終来迎があるのだという形で、大乘仏教一般で説かれています。そして浄土教の中で大いに展開していきます。念仏修行による見仏ということです。法然上人自身は口称念仏くしょうねんぶつを中心としていますので、見仏ということを積極的に説くことはな

いのですが、ご自身は三昧発得して見仏しているということは注目すべきです。

大乘仏教の展開の中で浄土教が発達していき、浄土三部経をはじめとするさまざまな浄土経典が成立しました。法然上人は『選択集』の中で、三部経ということを行いましたけれども、その三部経は『無量寿経』と『阿弥陀経』がインドで作られていまして、インドでは作られていないと言われている『観無量寿経』が加えられているという形になっています。

その後、インド仏教においては、浄土思想が展開していくに従って、龍樹の『十住毘婆沙論』であつたり、世親の『浄土論』であつたり、このような論書が作られています。

では、次に、大乘仏教のインドから中国への展開を見ておきましょう。まずインドの大乘仏教は、大体紀元前後に生まれるわけですが、先行する部派仏教の力が非常に強くて、最初のころはなかなかインド社会の中に浸透していかなかったと言われています。それで活路を海外布教に見出していくわけです。シルクロードを通じて——シルクロードだけではなくて海沿いのルートも通つたと言われていますけれども、中国に大乘仏教が入って、そこで大きく発展していきます。この時、浄土教も中国に入って、大きな展開を遂げていったのです。

中国の浄土教の流れとしては、知識人たちの流れと一般庶民の流れと二つを見ておくことが必要です。知識人たちの流れというのは、廬山の慧遠^{えおん}などを中心とした流れで、念仏結社を作って般舟三昧^{はんしゆさんまい}——これは見仏で、精神集中して瞑想して、瞑想の中で仏があらわれてくるということで、そういう三昧を目指します。このような白蓮社の流れに対して、もう一つの流れがあります。庶民の間では、死後に行く浄土として阿弥陀仏の浄土という

ものがだんだんと信仰として広まっていたということが出来ます。

中国浄土教の思想家としては、曇鸞^{どんらん}、道綽^{どうてつ}、善導^{ぜんどう}、懷感^{えかん}、小康^{しょうこう}など、いろいろな方がおられますが、法然上人から見ると重要なのが、善導です。善導は、称名念仏だけで往生できるということを強く打ち出します。それまでは、先ほど言いました見仏、仏を見るということ、観想念仏ということが中心的に説かれていたのですが、善導は、観想念仏を完全に否定するということではないのですけれども、それと並んで称名念仏だけで往生できるのだということを書きまして、大きな影響を与えています。

さらに日本の浄土教という事で言いますと、中国から早い時期に浄土教が日本に入ってきたと言われています。7世紀前半です。大変早い時期に入ってきます。例えば、聖徳太子が死んだ後に、その未亡人が作った天寿国繡帳^{てんじゅこくしゅうちやう}というものがあります。あれについてはどこの浄土をあらわしているのかということで、いくつか説があるのですけれども、近年はあれは西方浄土であるという説が有力になってきています。また、法隆寺には阿弥陀三尊像（伝橘夫人念持仏）が残されていますし、また『続日本紀^{しよくにほんぎ}』などを見えますと、「各国分尼寺に於て阿弥陀丈六像一軀、脇侍菩薩像二軀を造り奉る」（天平宝字5年）というような記事があったりしまして、古代から浄土信仰が非常に盛んであったことが分かります。

平安時代になりますと、最澄の弟子である円仁^{えんにん}が、比叡山に中国五台山の五会念仏を移植したり、また平安中期になりますと、源信^{げんしん}の『往生要集』が作られたりということで、浄土教が大変に盛んになっていきます。特に比叡山が浄土信仰の一つの大きな拠点になっていくのです。源信以来、天台浄土教が非常に盛んになりまして、法然上人はこの天台浄

土教を最初に一から学び、そしてそこからさらに自分独自の専修念仏せんじゆの教えというものを作り出していったという流れになるかと思います。

今まで、少し駆け足になりましたけれども、釈尊から法然上人までのごくごく簡単な仏教の流れについて押さえてまいりました。私自身として特に申し上げておきたいのは、釈尊が始めた仏教の中で、先ほど言いました無自性の教え——要するに無我の教えですけれども、無我の教えが説かれ、また他者を救うということが非常に重視され、それが大乘仏教の中でもう一度、確認されていきました。そしてそのとき、その流れの中で、一切衆生を救うという問題が提起され、さらに釈尊から隔たつていて、救われ難いという自覚も強く出てきます。そういう中で生まれた浄土教、そしてその浄土教が展開し、インドから中国、そして日本というように流れてきて、その流れが法然上人において大きく結実していったのです。この流れを、まず押さえておきたいと思います。

(つづく)

頼住光子ノよりずみみつこ

1991年東京大学大学院人文科学研究科修了。博士（文学）。

山口大学、お茶の水女子大学を経て、2013年東京大学人文社会系研究科倫理学専門分野教授に就任。

著書

『道元自己：時間・世界はどのように成立するのか』日本放送出版協会シリーズ・哲学のエッセンス、2005

『日本の仏教思想 原文で読む仏教入門』北樹出版、2010

『道元の思想 大乘仏教の真髄を読み解く』NHKブックス、2011

『正法眼蔵入門』（角川ソフィア文庫）2014

『さとりと日本人：食・武・和・徳・行』ぶねつま舎、2017

法然上人 と 親鸞聖人

【連載二十五】——「法身の生け捕り」——

林田 康順

（大正大学教授）

「信心為本」と「信の弥陀廻向論」は論理の矛盾を内包している？

前回まで二回にわたり、望月信亨先生による親鸞聖人を含めた法然門下の教えに対する説示を紹介しました。近年、こうした望月先生の説示を端緒として、本覚思想研究、さらには、中世仏教の実態を明らかにする研究が大きく進展しています。今号では、大阪大学名誉教授・平雅行先生による親鸞聖人への指摘について紹介します。平先生は、その名著『日本中世の社会と仏教』の中で、民衆解放という視点に立って、法然上人に目を向けて、非常に刺激的な論説を展開されました。ただ平先生ご自身は、法然上人の教えを徹底して、より広く民衆解放を成し遂げた方こそ親鸞聖人であるという視点に立って論を組み立てておられます。その後、平先生は『親鸞聖人とその時代』を刊行され、次のように説示されました。

さて、親鸞は従来のような「善い人」「悪い人」に代えて、独特の善人悪人概念を創出しました。そして信心の必要性を強調して、信心をもっていない人々に「仏智疑惑の罪」があると指弾しました。しかし他方では、この信心は如来から賜ったものであるはずで、阿弥陀仏はなぜその信心を「他力の悪人」にだけ与えて、「疑心の善人」には付与しなかったのでしょうか。彈圧という苛酷な運命を、なぜ阿弥陀仏は「他力の悪人」に背負わせようとなさるのか。「疑心の善人」たちは何ゆえに「七宝の獄」に閉じこめられなければならないのか。もしも阿弥陀仏の慈悲が絶対的なものであるならば、「疑心の善人」の存在自体が不可解ではないか。信心なき人々はなぜ存在するのか。いや、そもそも信心なるものに意味があるのか。機の深信は自力ではないのか。むしろ信心や主体性などといった自力のさかしらを超えてこそ、他力ではないのか。弥陀の誓願は、これら一切のはからいを吹き飛ばすほどの、絶対的なものでなければならぬはずだ。

親鸞の信心為本の思想と、信の弥陀廻向論とは、もともと論理の矛盾を内包しています。そして両者をつなぎとめる危うい均衡の破綻、これがやがて親鸞を、自然法爾思想へと向かわせた内的要因なのだろうと思うのですが、それはこのテーマから大きく逸脱する問題です。これで終わらせていただきます。（『親鸞聖人とその時代』

一六六―一六七頁）

平先生の指摘を補足すると次のように言えましょう。すでに本連載で縷々述べてきたように、親鸞聖人によれば、阿弥陀仏による衆生救済の大慈悲について正しい信仰を持てず、浄土宗鎮西派のように「助けたまえ阿弥陀仏」という自力の心でお念仏を相続している「疑

心の善人」達は、「仏智疑惑の罪」を犯しており、その結果、方便化真・方便化身土に位置づけられる有相の阿弥陀仏の来迎にあずかり、有相の莊嚴淨土に往生して、『阿弥陀經』などに「金・銀・瓊璃・玻瓈・磲磬・赤珠・碼碯」と描かれる「七宝の獄」に閉じ込められてしまうのです。一方、「他力の悪人」とは、『教行信証』において親鸞聖人が「至心に回向せしめたまへり」などと独自に訓点を施された、阿弥陀仏から正しい信心を賜っている人々となります。こうした親鸞聖人の思想は、信で救われるという「信心為本の思想」と、阿弥陀仏からその信を賜っているという「信の弥陀廻向論」の両者から成立しています。ところが、この「信心為本の思想」と「信の弥陀廻向論」の両者は、「卵が先か、鶏が先か」という議論のように、出発点が定まらず、論理の矛盾を内包していると平先生は指摘されるのです。

周知のように親鸞聖人は、建永の法難（承元の法難）において師法然上人と共に僧籍剥奪の上、俗名を与えられ、法然上人は土佐（実際には讃岐）へ、親鸞聖人は越後へと流罪の憂き目に遭います。『歎異抄』によれば親鸞聖人は、住蓮房・安樂房ばかりでなく、善綽房・性願房を加えた計四名の方が処刑されたと理解されています。こうした凄まじい弾圧を見聞した親鸞聖人は、どうして「疑心の善人」には弾圧が及ばず、正しい信心を得ている「他力の悪人」だけが、苛酷な弾圧を背負わなければいけないのか、さらに、そもそも阿弥陀仏は「疑心の善人」ばかりでなく、弾圧を加えた者達も含め、なぜすべての人々に正しい信心を回向されなかったのか、と疑問を抱かれたことでしょう。

そもそも、『無量寿經』の法蔵説話が開示する「淨土三部經」の世界観に立つ法然上人の教えでは、時間軸と空間軸が明白なので「論理の矛盾」をきたすことはありません。し

かし、そうした酬因感果の有相の阿弥陀仏と極楽浄土を方便化身・方便化身土と位置づけ、久遠実成の阿弥陀仏を真仏と規定することによって、親鸞聖人が構築した「信心為本の思想」と「信の弥陀廻向論」とを巡る論理の矛盾が露呈することとなるのです。

つまり、阿弥陀仏の存在が法身をより所としているのであれば、その力が行きわたらないはずはないのですから、仏の側から信心を賜るのであれば、すべての人に平等に与えられなければおかしいはずであり、「他力の悪人」と「疑心の善人」が共存している状況自体が不可解となるのです。その結果、親鸞聖人は、「信心為本の思想」と「信の弥陀廻向論」とを結びつけるため、「浄土三部経」の世界観を自ら手放し、自然法爾思想へと向かうこととなるのです。

「法身の生け捕り」と「法身の取り逃がし」

もう一箇所、平先生の説示を紹介しましょう。

そして、最後は…、親鸞がなぜ東国門弟に聖覚と隆寛の著作を勧めたのか、という問題です。これも根本的に考え直さないとけません。しかしすでに石田瑞磨氏は、『唯信鈔』と親鸞の思想との思想的異質さに着目し、こうした文献を送付したところに東国門弟の混乱の原因があった、と述べています（『法然上人と親鸞聖人』秋山書店）。私は、晩年の親鸞は次第に世界に対する思想的な見通しを失っていったと考えていますが、そうしてみれば、『唯信鈔』の送付の頃から、親鸞の躰きが始まっていたのかもしれません。

いずれも答えの必要なものばかりですが、親鸞研究から遠ざかってしまった今の私に

は、回答不能なものばかりです。若い研究者の方々に、是非ともこれらの課題に挑戦していただければと思います。（『親鸞聖人とその時代』二二三頁）

「晩年の親鸞は世界に対する思想的な見通しを失っている。」実に刺激的な物言いです。平先生の専門は史学ということもあり、法然上人と親鸞聖人の仏身・仏土論の細かい相違にまで言及はされておりません。しかし、本連載においてこれまで縷々述べてきたように、平先生が保留された回答が、法然上人と親鸞聖人との仏身・仏土論の根本的な相違に求められることは明白であり、そのことは次のようにまとめられます。

・法然上人―「浄土三部経」の世界観の堅持、〈娑婆と浄土〉〈凡夫と仏〉の隔絶、

偏依善導一師、相対的二元論、法身の生け捕り

・親鸞聖人―「浄土三部経」の世界観の瓦解、〈娑婆と浄土〉〈凡夫と仏〉の一体化、

七高僧、絶対的一元論、法身の取り逃がし

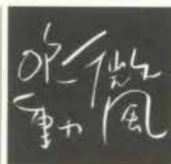
つまり、法然上人は、「浄土三部経」の世界観、すなわち、五劫思惟・兆載永劫の修行を経て十劫前にさとりを開き、三業相応が叶い、来迎引接される阿弥陀仏と西方十万億仏土を経た国土清浄・国土嚴飾を成就された極楽浄土をそのまま信仰されます。この教えは、『法華経』や『般若経』、『華嚴経』や『大日経』などの世界観や他宗の教学にいつさい煩わされることなく、「偏依善導一師」の視点に基づいて一代仏教を帰納的に領解した結果であり、〈娑婆と浄土〉〈凡夫と仏〉はどこまでも隔絶した関係となる相対的二元論の世界観です。法然上人は、『選択集』第三章段の中で、阿弥陀仏の内証の功德として「四智・三身・十力・四無畏」を挙げられます。この中、「三身」とは「法身・報身・応身」のことですが、私は阿弥陀仏の内証の功德の中に「法身」を組み入れた法然上人による英断を

「法身の生け捕り」と呼んで、実に尊い偉業であられたと広く訴え続けています。なぜなら、法身を内証の中に「生け捕り」しておかないと、それこそ千変万化してしまう結果を招き、「浄土三部経」に説かれる阿弥陀仏が次々と相対化されてしまうからです。

一方、法然上人と別離の後、晩年の親鸞聖人は、自身の宗教体験に基づいて阿弥陀仏と極楽浄土の探索を独自に進め、「浄土三部経」の世界観を三願転入、真仏・真仏土、方便化身・方便化真土などといった理解によって瓦解させ、龍樹・世親・曇鸞・道綽・善導・源信・法然という七高僧の教えによってそれを裏付けようとされます。その結果、親鸞聖人は「阿弥陀仏は光明なり、光明は智慧のかたちなり」「弥陀仏は自然のやうをしらせんれうなり」といった理解に至り、せっかく法然上人が「生け捕り」して下さった法身を「取り逃がし」てしまわれるのです。そのことは、法然上人が相対的・二元論の世界観を確立して下さったにもかかわらず、多くの経典や宗派が呈示する絶対的・一元論の世界観に回帰してしまうことに他ならないのです。

もちろん、伝統的真宗学の中では、親鸞聖人の阿弥陀仏理解をどこまでも報身と捉えますので、私の指摘を受け容れてもらう余地ははなはだ少ないことはあらかじめ申し上げておかねばなりません。しかし、浄土学の視点からみた両祖師の相違を正しく理解することが、各祖師の教えを学ぶ最短の道に他ならないこともまた事実なのです。

（続く）



微

風

吹

動

自分らしさをまとう

季節が耳打ちする

「似合わない服を脱げ」と

きつと君は気づいてた

目的を通り過ぎたと

(折坂悠太「坂道」より)

導 量 藤 工

十数年前、たまたまつけたテレビ番組に二人の女子大学生が取りあげられていた。テーマはファッションで、片方はゴシック・アンド・ロリータ（ゴスロリ系）の、黒を基調とするヨーロッパ風のレースやフリル、リボンで飾られた華美な洋服を着こみ、性格はやや内気で、なんだかあまり自信がなさそう。もう一方はコンサバティブな服装（コンサバ系）の、いつの時代でも受け入れられやすい清潔感あふれる格好をして、社交的でズバズバと意見を言う、クラスにいたら中心的存在だろう。同じ大学内にいても自然には親しくならなそうな対照的な二人。それを引き合わせることにによる化学反応を期待する、そんな番組趣旨だったと思う。

結果は、コンサバ系の女性がTPOにふさわしいファッションの社会的な優位性を熱弁し、それをゴスロリ系の女性が譲れない気持ちにはありながらもすごすごと受け入れる、一方的な寄り切りだった。多少なりとも互いの主張を受け入れ合うという展開を予想した自分としては、思いがけない圧勝劇に、多数派の強さという社会のリアルを見せつけられた気がして、釈然としないモヤモヤ感を抱いてテレビを消した。誰かの感想や同調を求めようにも、ツイッターなどのSNSもまだ盛んでなかった頃のことだ。

今年読んだ漫画の中でもっとも気に入っている作品に『着たい服

がある』（常喜寝太郎作）がある。あらずじは、ロリータファッションに憧れる女子大学生のママは周りの目を気にする臆病な性格で、せっかく購入したロリータ服も、外に着てゆくことはおろか、誰にも言えない秘密になっていた。そんな折、堂々と奇抜なファッションで身を包むバイト先の同僚の姿に感化されて、少しずつ自分の本当のあり様を周囲に解放してゆく物語である。

とりわけ心を打たれたのはこんな場面だ。ママの趣味を知るが、どうしても理解できない母親は大きなショックを受けて家出する。傷心のママは偶然出会ったロリータ服を颯爽とまとう先輩に「服をバカにされるのは自分自身をバカにされているのと一緒にですよね？」と尋ねる。ところが逆に「服に『自分らしさ』を委ねてたら、いつか脱ぐのが怖くなっちゃうよ？」と問い返されてしまう。

数日後ようやく戻ってきた母親は、一緒に好きな服を買うに行こうと提案し、ママの気持ちを理解するために勇気を出して自分もロリータ服を試着してみる。ところが試着室の鏡に映る自身の姿は想像以上に似合っておらず、情けなくて思わず涙がこぼれてしまう。察したママは試着室の仕切りを開け、思いを伝える。

「私は私。お母さんはお母さん。好きなものは同じじゃない…。それぞれ：違う、ひとりの人間なんだよね。だからお願い…。

これまでの二〇年間私を愛してくれたように……この服のことは
わからないまま……私を……愛してほしい……」

母親は「あたり前じゃない……」とうなずき、一緒にロリータ服姿
のままで記念写真を撮る、という場面である。

その時、ママが着ていた服はなんだか質量が格段に軽くなったみ
たいで、服を着ながらにして、何かの重みをドサッと脱ぎ落したよ
うに見えた。服に私らしさの象徴としてアイデンティティを投影す
るのでなく、服と私を切り分け、「《私には》着たい服がある！」と、
ようやく自分の好きと向き合うことができたのだ。ママはロリータ
服を着ていない時も、自分らしさをまとったままで共に生きゆくす
べを、その足がかりを得たのだと思う。

冒頭にふれたゴスロリ系の彼女は、今はもう同じファッションを
していないかもしれない。好きであり続けること、変わらないでい
ることは奇跡のようなものだから。それでも時には、衣服の替え時
を言づける季節の微風が、好きでたまらなかった自慢の服をまと
い歩いたあの頃の肌触りや匂いを思い起こさせ、偏愛してもらった
服たちの感謝の気持ちこそと耳打ちしてくれているのではない
か。そんな樂觀的な想像をしてみても、ようやく自分の中でくすぶり
淀んでいたモヤモヤ感に風を通すことができた気がするのだ。

第三十二回

江戸の川 を歩く

江戸ウォーカー

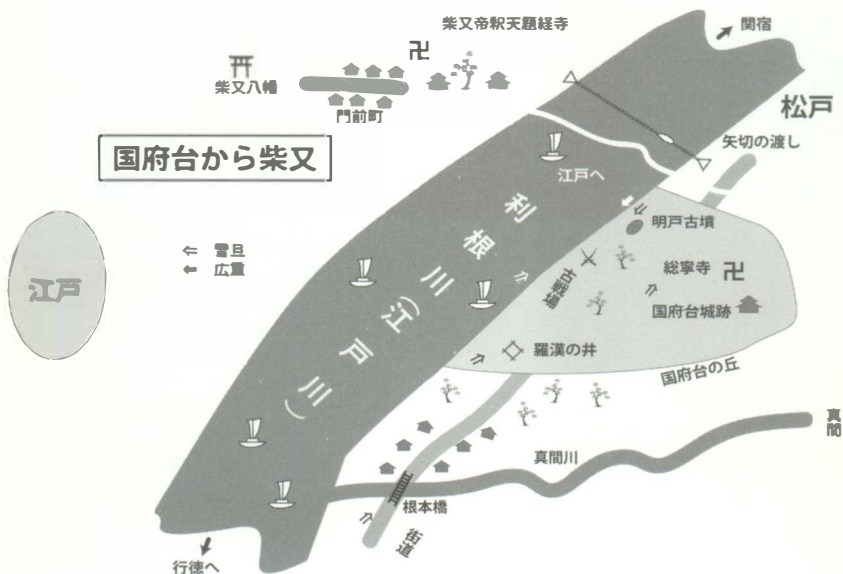
森
清鑑

江戸川(利根川)「3」

国府台から柴又まで

このだいの国府台

利根川(江戸川)を北上しよう。真間川に架かる根本橋を渡り、根本村の民家を抜けると坂道になる。崖道。崖の上には木々が生い茂る。すばらしい自然の山道。そして広い丘に出る。周囲は木々が豊富だ。そこが国府台である。国府台は見晴らしの良いところで西側からは遠くに江戸城が拝め、その背後に富士が聳えている。見下ろせば、滔々と利根川が流れて。東を見れば、美しい真間の景色が広がっている。利根川に注ぐ真間川が蛇行し、砂州を形成。継ぎ橋。松並木。絶景が展開。かなたに弘法寺も見える。真間は『万葉集』にも登場し、江戸期にも、文学者に好まれた土地である。



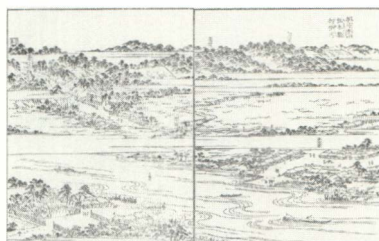
国府台城跡

丘に出ると直ぐ右手に国府台城の跡がある。太田道灌（扇谷上杉家）がここに陣屋を置いたことから始まり、戦国時代千葉氏、里見氏、北条らが覇権を競いあつた舞台である。しかし家康が天下統一すると、この城を廃絶。その理由は「江戸を見渡せる」ということだが、そんなことよりも上総、下総全体を統括するために、太平洋側から睨（にら）みをきかせる戦略をとつた。そこで大多喜城を拠点としたのである。ために腹心中の腹心、本多忠勝を配備。忠勝は難攻不落の堅固な城を築く。かくて国府台城は、江戸時代には城跡を残すのみとなつた。面積はかなり広く、所々に石垣が残っている。

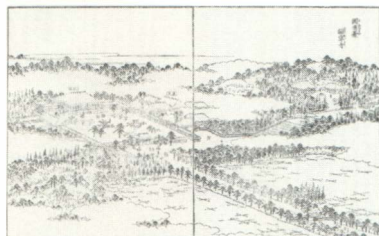
総寧寺

その城跡の北に隣接し、広大な総寧寺がある。曹洞宗のこの寺は近江にあつたが家康の勸請を受

け、二代秀忠が利根川本流との分岐点、関宿に移す。しかし度重なる水害被害のため、家綱が国府台に移設したものである。雪旦は克明に描く。長い参道。両側は木々が立ち並ぶ。大門を潜り、さらに直進するとやっと山門に出る。方形の寺域。正面、仏殿。その左に梵鐘。そして仏殿の右手に方丈が連なる。周囲は見渡す限りの森の丘。江戸時代の様子を克明に捉えている。



江戸名所図会 雪旦：「根本橋利根川」：下に滔々と利根川が流れ、中央に根本橋。右へ蛇行する真間川。根本橋から左街道を上がっていくと国府台。



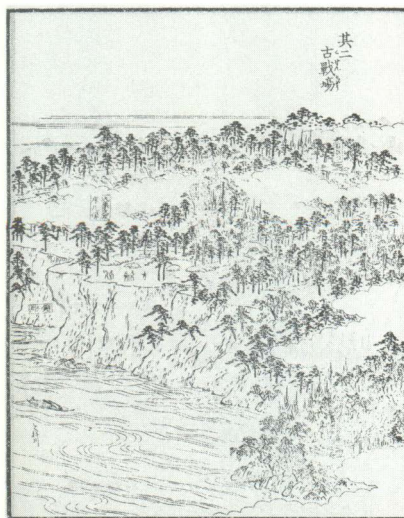
江戸名所図会 雪旦：「国府台総寧寺」

羅漢の井戸

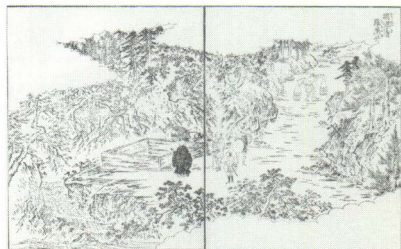
国府台城の城跡の左、利根川の方へ崖道をちよつと降りていくと羅漢の井戸がある。滾々と湧き出ている清水。正方形の井戸枠。水をくむ旅人。総寧寺の僧侶の姿。天秤桶を担いで坂道を上がって行く住民。このような高台に湧き出る、貴重な命の水。この希有な自然の恵みが国府台城や総寧寺を支えてきたのである。無論、旅人にとっても命の水であつたろう。弘法大師が発見したというこの井戸は近年まで飲料水として飲めた。今は飲めないが跡はきちんと祀られている。

再び高台に出てみよう。利根川、高い崖、鬱蒼とした森。全て戦国時代の古戦場跡である。下総の千葉氏、安房の里見氏、扇谷上杉、北条氏などによる覇権争いの舞台であつた。雪旦は古戦場として此処を描く。崖下は利根川の水が洗っている。古戦場の北側に明戸古墳がある。この辺り一帯には古墳が多く見られるが、国府台北側にある明

戸古墳は代表的なものである。太田道灌が当地にやってきたときにはすでに石棺は露出されていたそうだが、肥沃な利根川沿いには縄文時代からの集落が沢山あつたのに相違ない。さあ、古墳の左側、利根川の方に行つてみ



江戸名所図会 雪旦：古戦場



江戸名所図会 雪旦：「総寧寺羅漢井」

よう。眼下に悠々と流れる利根川を見下ろす。目線を上げると、江戸の景色が丸見えである。雪旦も広重も同じような場所からこの絶景を描いている。広重の絵では「鴻の台」となっているが、これは此処にコウノトリが生息していたからである。大きな帆船が荷を積んで江戸に向かって列を成している。その先に見える山景色は丹沢であり富士である。つまり、この絵は国府台から河口の行徳の方に向かって描いているわけである。このような絶景だから江戸つ子はこぞってハイキングにやってきた。

矢切の渡し、柴又

国府台の丘から降りて利根川沿いの街道を北に歩く。するとまもなく矢切の渡しに出る。利根川（江戸川）は全て舟の「渡し」による往来。江戸時代、一般の旅人は市川の関所を通らねばならないが、農民特権であちこちに畑を持つ農民のために渡しがあった。矢切の渡しもそれで今日も残る最後の渡しである。利根川を渡るとその先は柴又。

今では、映画「寅さん」で有名な町だ。

江戸末期、この渡し場を降りると、すぐそばに川魚料理の店、川甚があつた。利根川の岸辺にあり、滔々たる利根川の流れを見ながら、魚料理に酒を愛でた。文人墨客が出かけたところである。

柴又八幡神社

柴又村の歴史は古く、正倉院古文書に「嶋俣」と紹介され、数百人の村と記されている。辺り一帯は、古くから人が住んでいたはずで、村の鎮守、柴又八幡神社は古墳の跡である。この古墳は六世紀後半のもので昭和四十一年の調査で石棺、遺骨、刀、馬具、埴輪などが発見され、杜殿背後の嶋俣塚に納められた。江戸時代、人々の集いの場所



江戸名所図会 雪旦:「国府台 断岸之図」

柴又帝釈天

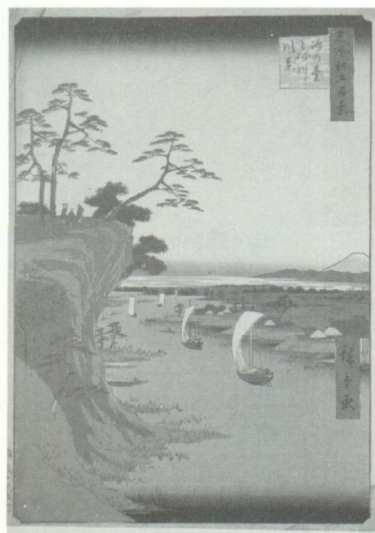
あり、疫病退散で人々がすがった獅子頭三頭が社宝。境内には「柴又勸農事績碑」が立つ。これは利根川の氾濫と大凶作で壊滅的打撃を被った江戸中期、名主が先頭に立って関東一の裕福な村にした。時の代官が感謝の褒章を与え、記念碑としたのである。この村民の精神的支柱八幡神社から西へ、利根川に向かってちょっと歩くと、柴又の帝釈天である。

なんとと言っても江戸っ子にとって柴又を馴染みとしたのは、柴又帝釈天である。正式には日蓮宗経栄山題経寺。寛永年間に日忠、日榮によって創建。天明三年（一七八三）、中興の祖、日敬は日蓮が刻んだ帝釈天像とお題目からなる板本尊を背負い、天明の大飢饉で苦しむ江戸市中を巡る。人々はこの帝釈天にすがり、懸命に拝む。そして効験を得る。こうして江戸市中で、柴又の帝釈天は一気に有名になる。結果、帝釈天の縁日には、大挙

して柴又に押し寄せるようになる。繁栄に連れ、門前町が形成される。多くの名店が、皆、この頃に創業しているのである。

門前町の参道を歩いて突き当たると、そこは二天門。入ると、左に鐘楼。そして正面に「瑞龍の松」が帝釈堂に覆い被さるようにある。この松は樹齢四百年（伝曰く四百六十年）。江戸の人々も煌びやかな門を潜って目の前に横たわるこの松に圧倒される。本堂（祖師堂）は右手にある。いつでも賑わいに満ちている帝釈天である。

（続く）



広重：「鴻の台とね川風景」

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第二〇二回

第三部

充実と稔りの白秋へ

「御代替わり」と「三教会同」 その二



軽忽粗雑、甲論乙駁を生むのみ

明治から大正への「御代替わり」の直前、日本の宗教界に突然ふつておりてきた「三教会同」。これにドイツから帰国したての渡辺海旭はどんな反応をみせたのか。その開催の直前、主筆をつとめる「浄土教報」には、

「内務省の三教会同計画を評す」

と題された長文の論評が掲載された。概要は以下のとおりであった。

*

「内務省の三教代表者会同問題は、いつてみれば『宗教家利用案』である。

宗教家たちがさかんに議論をかわし、あるものはこれに反発、あるものはこれに迎合する動きを見せていると伝えられている。しかし、これは大問題のように見えるがそうではない。ここは冷静沈着になり、宗教家はそれぞれの職責と本分につとめるべきであらう。いたずらに付和雷同し、逆に軽挙妄動にでるべきではない。

そもそも異なる宗派が『会同』することは、ヨーロッパにおいても、わが日本においても、珍しいことではない。シカゴ、パリ、ロンドンでの宗教大会はいうにおよばず、わが国においても日露戦役時にもたれた『教家大会』のように、その効果のほどは別にして、形式としては『神（神道） 仏（仏教） 耶（キリスト教）』の『会同』は過去に例がある。（『壺月全集』下巻、一八一〜一八五頁、以下同）

そう記してから、盟友の高島米峰を驚かせた決め台詞、「今回のそれは『遼東の豕』（自分だけすぐれていると思ひ込んで得意になっていること）でしかない」と断じて、こう続けられた。

「単に『国体擁護』『地方自治』『健全思想宣伝』といった会同のための謳い文句は、どんな宗教であれ、どんな哲学であれ、その根本精神を受け入れて実行すべきテーマであって、それをいまさら唱えて会合を促すのは、当たり前の大前提であり、したがってそもそもそのために集まる意味などない。

慈善事業においても、社会問題の研究においても、仏（仏教）と耶（キリスト教）がようやく寛容主義のもとに動きつつある。すでに東京では両者が『浮浪人研究会』や『動物愛護会』のような活動で接近し、思想面での交流もなされていることは今や識者の認めるところである。したがって、この寛容の動きを政府から命じられるのを待って進める必要が今さらあるだろうか。もし政府が今回の『会同』をもって各宗派の交際を進めることができると考えているとしたら、とんだ回り道である。

政府が『会同』をもって『保護』『教家優待』などなんらかの優遇措置を宗派に約束、あるいはこれをつかつて宗派を走狗として利用しようとしても、今回のような軽忽粗雑なやりかたでは甲論乙駁を生むだけで、畢竟にも得ることなく終わるであろう。

今回の会同は実に平凡と言うほかない。意外というべきは、この平凡なる会同が幸いにも政府がついに宗教の実力を認めざるを得ないことを証明したことであって、宗教人はこ

れをもつていつそう奮励すればよい。政府に對して、宗教の現状について研究調査を促し、公正堅実な対宗教方針を確立させる好機となつたことを喜ぶべきであらう。

朝鮮半島においては統監時代（二年前、明治四十三年の日韓併合以前）の拙劣卑屈な政策の失敗によつて、未だキリスト教徒取締が放置され、また内地においてはカトリックやギリシア正教は外国人を主教として（日本人教徒を）監督するという霧裡彷徨の中にある。これらの諸問題が解決されないまま今回の会同を催しても、政府の対宗教政策としては全く意味をなさない。

また神道に対しても政府は態度を明確にすべきである。一步ひとまた謬まちがひてば国体に危難を及ぼす恐れがあり深重を要する。天理教のような、ようやく淫祠から脱却したばかりの宗派を仏教や耶蘇と同じく経世の資となさんとするは、世界の有識者の笑いのものとなるだろう。神道の扱いについてはなお三思、十思、百思の余地がある」

三教会同は時期尚早

ここで海旭の筆は一閃、ドイツで得た、既視の歴史的知見を政府内務省へつきつける。「ドイツ帝国において一八七二年公布によって定住することすら厳禁とされたイエズス会だが、近年、有力な神父が来日、大学の設立を進めていると言われている。信教の自由を標榜するわが日本においてイエズス会法を制定せよとはいわないが、彼らの処遇をめぐってドイツ連邦議会が何度も紛糾し、英仏諸国の政治家たちの間でも大議論になったことを内務省は、果して知っているのだろうか」

これは四十年ほど前、ドイツの鉄血宰相ビスマルクがカトリックの分裂に乘じ、プロテスタントを味方につけながら当時はカルト的過激派とされたイエズス会を国外退去処分にしたエピソードをさしている。

さらに海旭は、内務省の浅慮を危惧しつつ、海旭流の「国家と宗教」関係論を開陳する。「宗教が国家に報効すべき方面としては、軍

隊での布教、監獄での教誨、産業界での奨励などの役割があり、その所管は内務省にとどまらない、陸海軍省、逓信省、農商務省、さらには海外での仏教の布教活動を考えると外務省も関わる。内務省には、宗教に対して精確明瞭な調査を第一義とする一方、宗教に関係する各省庁との有機的連携が求められる。それをせずして今回のように粗忽躁急な会同を主宰しても、その効果は見込めない」

そしてこう結論づけるのである。

「今の状況においては、三教会同は時期尚甚だ早し。これを機として着実なる方針を以て『宗教調査会』のごときものを設け、宗教界の宿老をあつめておもむろに事を進めるべきであらう。」

政府の仕掛けの裏に実業界の大立者

海旭による辛辣な論評から旬日、三教の代表者が華族会館に招かれ一堂に会同した。しかしながら、政府側からは内務大臣・原敬を筆頭に司法、海軍、逓信大臣ら赫々たる要路

二十一名が列席、神・仏・基の三教からは五十一名の宗教人が出席したものの、仏教側の有力宗門である浄土真宗東本願寺派が「憲法に定められた宗教の自由を侵す可能性あり」として欠席。政府が目論んだ「三教の連携をもって皇運を扶翼し国民道徳を振興する」大目的は画龍点睛を欠いて、海旭の「時期尚甚だ早し」の警告が的中する形となった。

それをうけて、海旭は再び筆をとり、前にもまして辛辣なる論評でとどめを刺した。

「三教会同問題は世論の喧噪に似ず平凡に終了したが、東本願寺の旗幟鮮明なる欠席によりて不統一の欠陥を示した。さらに天理教のごとき新興の教団が伝統ある仏教と基督両教と肩を比べることで滑稽の妙を加え、さらにギリシア正教の代表が純国家主義の会合に出席することにより撞着をみた。しかし、平凡なる結果に、この不統一と滑稽と撞着という警戒の味が加えられたことをむしろ喜ぶべきである。なんとなれば、今回の会同が動機と準備ともに尚幾層の注意が肝要であることの

活きた証拠となり、政府の宗教政策に一層の堅固と着実と精励の必要を明らかにしたからである。今回の会合によつて国家のために報効する宗教界の実力を認めた政府には、今後宗教に対する周到着実な調査と公正謹嚴な監督とを切望してやまない」

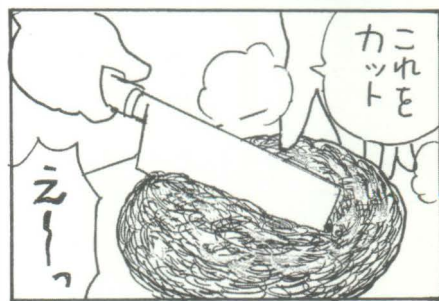
そして、最後に政府と東本願寺との仲裁を買って筆を擱いた。

「もし政府に東本願寺を問責する意図があらば、それは愚者の夢にすぎぬと笑ういっぽう、本願寺の諸君には敏慧すぎる神経を聊か緩めることを勧めたい」

おそらく海旭はこれで三教会同問題は一件落着をみたと思つたはずである。しかしそうはならなかった。実は政府の仕掛けの裏に、日本近代化の父であり実業界の大立者の渋沢栄一がかんでいたからである。そして、それが機縁となつて、数年後、大アジア主義者の頭山滿を仲介者に渋沢と友誼を結ぶことになろうとは、当の海旭は想定もしていなかった。

(つづく)

さっちゃんはネッ
かまち♡ふう



編集後記

念仏に心鎮まる十夜かな

岱潤

今年の夏、常磐道で衝撃的なとおり運転と暴行の映像が流れ、また八月には大坂で僧侶が法服であり、恫喝をしている映像まであって、あたり運転が人ごとの話ではなくなっていました。

「人は生きるように運転する」という言葉があるそうだが、ハンドルを握ると人が変わるという人がいる。普段見せないその人の言動に驚くことが私も何度もあった。運転に少し自信のある人が多く、相手のわずかな行為に反応し、怒りを露わにする。

アンガーマネジメント協会なるものが

ある。まさに怒りをマネジメントする研究会だ。その代表の方に話を聴いた。

怒りがおきくことは仕方がないとして次の行動、即座に反射することが最もよくないという。「売り言葉に買い言葉」はだめ。「六秒間言葉を言うな」となる。大事なものは怒りの本質を理解するために、怒りを紙に書き出せという。すると怒る必要があるものと、必要のないもの、怒らなくていいもの区別がつくという。つまり怒りに走って後悔しないですむという。

釈尊は「第二の矢を放つな」と仰せになった。第一の矢、痛い、つらい、苦しいはどうしようもない感情、それは誰でも

もうけるが、その次の第二の矢、怒りの爆発は避けるということだ。

第三者から見るとあまりに大人げないあたり運転、怒りが自分自身への甘えであることも怒りの本質だという。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十五巻十月号

頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 令和元年九月二十日

発行 令和元年十月一日

発行人 佐藤良純

編集人 加藤昌康

印刷所 株式会社 晩印刷

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四丁目四明照会館四階

発行所 法然上人顕仰会

電話 〇三(三)五七八六九四七

FAX 〇三(三)五七八七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森巖寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤久雄(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
河本悠大(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
成田昌憲(世田谷・大吉寺)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
水科善隆(長野・寛慶寺)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp/>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

写経と写詠歌セットのご案内

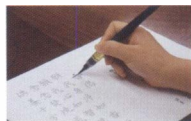
特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名 () を入れる・入れない

※関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※消費税と送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

月刊**浄土**の連載が
単行本になりました。

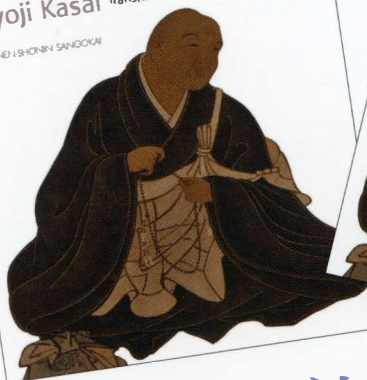
裏

左開きで英文の
Honen Shonin's Saying

HONEN SHONIN'S SAYING
法然上人のお言葉

Noboru Kajimura Author
Ryoji Kasai Translator

HONEN SHONIN SANGOKAI



表

右開きで和文の
ご法語

法然上人のお言葉
HONEN SHONIN'S SAYING

梶村 昇 著
河西良治 訳

法然上人讃仰会



和英対応 法然上人のお言葉

梶村 昇・著 河西良治・訳

ご法語と解説が和文と英文で一冊になりました。

外国の方のお土産にも最適です。A5判・124ページ 頒価 1,000円（税別）

電子書籍は下記 QR コードよりご購入いただけます。

日本語版 (Japanese)

英語版 (English)

日本語版 (Japanese)

英語版 (English)

HONTO



AMAZON



法然上人讃仰会だから
こそ作れる
オリジナル単行本です。

法然上人讃仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。